



小田実座談会

毛沢東を

今、

い、だ、こ、も、も

今田好彦

中嶋嶺雄

司会 小田実

語る

近頃、はやらない毛沢東

小田 僕は『毛沢東』（岩波書店）という本を書く時に、毛沢東についての文献で必要なのがあったので、左翼の活動家のいる本屋に行ったのですが、「毛沢東」なんてものは一冊もない。エドガー・スノーも何もないんだよ。中国革命と毛沢東だけはない。ビックリして、「毛沢東」はないのと聞いたら、はやりませんよと言われてね。中国の本なのかと言ったら、あっちにようけあると言われて行ってみた。太極拳の本から旅行案内から、たしかにわんさどある。しかし、毛沢東、中国革命の本はない。

今、日本の思想状況でなんとなく弛緩してしまっている部分があると思う。ポル・ポトの虐殺にしろ「文革」の失敗にしろ、「第三世界」あるいは社会主義世界側であまりにも失点が多い、あるいは失点が眼に見えて来る。昔は第三世界、社会主義社会というところ、こちもまともな挑戦を受けてるような気があった。ところが今、言ったような第三世界、社会主義社会双方でのいろんなややこしい問題が出てくる。それに乗りかかってこちらがまともにものを考えなくてすむということがあ

るんじゃないかと思うんです。相手がよくないことで何か自動的にこちらが免罪されてしまった感じで、自分側のことをまともにも考えなくてすむ。そこで思想的に弛緩して来ている。それは我々全体の大きな問題ですね。

つまり向う側に失点が多いとこちら側がそれだけでプラス価値をもってくるみたいになる。そういう状況にあるので、逆に今の中国をちゃんと考えてみようじゃないかという問題意識が私にはあるんです。それで去年半年、私は中国に行ったのですが、この座談会も、同じ問題意識があつて聞くことにした。できるだけ自由にしてやべつて我々自身の勉強にしたいというのが私の趣旨なんです。ひとつのまともにももの考えるきっかけになるような座談会になるといいと思いますね。

中嶋さんは文革に初めから否定的な見解を持たれて首尾一貫してる。いいださんは文革を現在も支持されると私は勝手に思ってるわけだ(笑)。今田さんは五年間北京の特派員でこないだ帰ってきたばかりだし、文革の時も中国に行かれてるから、その時の状況と今の状況をいろいろ考えられると思うんです。私自身は中国についてかつては何も知らなかったし、中国ファンでも何でもないん

だけど、毛沢東のこと、「文革」のこと、中国のことを、今こそ真剣に考えたいと思つてゐる。

中国は今急速に動いてると思うんですね。そこで現在の状況をどう見るのかというのを皮切りにしたいと思うんですが、中嶋さんいかがですか。

中嶋 実は、僕は深圳に行つて帰ってきたばかりなんです。一般の報道では深圳が経済特別区として資本主義的な要素をとり入れてさまざまの発展だというんですけど、僕はそう簡単にゆくはずはないと思つて今度も行つたんです。案の定、資本主義の悪い面だけがどんどん深圳に出てきちゃつて、よく言われる拜金主義というか、中国人はもともと金銭感覚にさといですから、毛沢東時代に抑えられてきた反動が極限的に出てます。これでは中国は大変なことになるといのが率直な感想です。

それから日本人の立場で中国を旅行すると確かに快適ですよ。いいホテルに泊つておいしい料理食べて。だけど、中国人の側から見るとどうなんだろうなあとつい考えてしまう。深圳にたつて普通の中国人が自由に来れるわけじゃないし、北京、上海のホテル、

あるいは外貨商店に一般の中国人が簡単に行けるわけでもない。行けるのは幹部だけ、つまり特権階級ですからね。結局、社会主義のもとで租界ができてしまつたようなものでしょ。むしろ中国の中でも、一体中国革命とは何だつたのかという声が再び出始めています。そういう意味で中国は今かなり大きな転換期にあるし、鄧小平路線の富国強兵策の補完的部分として資本主義的な要素をとり入れるということですから、ますます矛盾、混乱が大きくなるんじゃないかという気がしています。私は現在の開放体制を手放して替めるわけにはいかないうような気がしています。ですから、かえつて毛沢東が懐しくなるんですけれども(笑)

いいだ 奇妙なご縁で中嶋さんと僕はぐるっと円をまわつて今では一致してるわけね(笑) 中嶋 僕は『毛沢東語録』を訳してるんですよ。その時僕は『毛沢東語録』はまもなく中国のベストセラーじゃなくなるだろうと書いておいた。そうしたら、本当に毛沢東がどこかへ行つちやつたでしょ。あんまりなくなりすぎちゃつたんで、ちよつと毛沢東が懐しいという心境です。

小田 いいださんはそれを受けてどうですか？

こないだ中国の英字新聞を見たら、鄧小平が中国は資本主義に帰らないとわざわざ演説してそれが大きな見出しになってる(笑)いいだ 帰ろうと思って帰る人はいないわけだからね。小田さんが最初に言ったことを僕は感心して聞いてた。小田さんの憂世の言だね。世を憂えている。

小田 世界を憂えてるんだよ(笑)

いいだ だから、憂世じゃない(笑)。骨のズイからじわじわと腐っているというか、腐りどめがかかり過ぎているから一見健康体であるようにみえるというか、独特な「ジャパン・アズ・ナンバーワン」的な我々自身の腐り方がある。そのもとの私たちの生き方の問題がまさに命を革(あらた)める問題として出てくるんだらうと思う。今日は中国を鏡としてそういう話をしようというところでしようから。中嶋さんとはプロ文革の時はバリエードの向うとこちらだったんだけども(笑)。今、お会いしてみると二人ともある意味ではナツメロの時代で、毛沢東が懐し(笑)ということになってる。

深圳ですけど、入口に「時は金なり、節約は命なり」という看板が、
今田 「効率はや命なり」

小田 そうそう。大業にもかかってたよ。

いいだ そうですか。僕は戦前幼児の時から「時は金なり」「タイム・イズ・マネー」と親からも先生からも言われ続けていたという感じがある。小学校六年の時に近眼になったり、それから我々の時代だと女工京史じゃないが青年はみんな肺結核ですよね。それと同じような後発的な近代化を強制される状況のもとをひた走りに走って、人々は近眼になり神経衰弱になり肺病になりながらめいめい頑張っているんだらうと思うから、そのこと自体をあまりひやかす気にはなれない。

しかし、やっぱり「時は金なり」という価値規範は、ブルジョアのなものであって、競争がすべてであるという価値規範ですね。時間概念までも工業社会的に容れられつつあるんだなという感じがする。逆に言うと、プロ文革を経たにもかわらず、その挫折後の人民中国は、資本制工業社会の生産力とかテクノロジーが要求する鉄のロジックに対して本当の意味では対抗力をもっていない。当時、中嶋さんの本を一所懸命、反面教師として読ませて頂いて、こんちくしょうとか思いながら読み破ろうとしたんだけども(笑)。プロ文革はつぶれるぞという予想は不思議なことに

一致してたんだよね。

小田 あなたはつぶれると思ってたの？ つぶれないという顔してたじゃない(笑)

いいだ いやいや(笑)。出し遅れの証文なんて大した意味はないが、僕は毛沢東が死ぬ直前に中国に招かれて、色々考えた末に、一回だけはご馳走になろうと行ったわけ。ブノンベン解放祝賀集会が北京であって、吉川勇一さんが団の秘書長として参加した。マア、当時のベトナム反戦運動としても昇りつめて、満願成就間近しという気分があったことも当然だ。ちょうどその時、張春橋の「プロレタリアート独裁の全面化を論ず」という論文が出て、宿舎の北京飯店でわれわれにも配られた。僕はこれをすぐ読んで、その夜の団会議で、いま中国は累卵の危機にある、まもなく内戦が始まってプロ文革派は重大な試練にさらされるだらう、という議題提起の予告を吉川秘書長にした。だって、上部構造に進駐した労働者階級が社会を全面接収すると張春橋はいうわけだが、その「労働者階級」というのはフィクションですからね、自主管理できる能力の成熟はみられないわけだ。文革派ががんばっているだけで国家支配の全面化にならざるをえない、ジャコパン独裁の失

脚と同じ襷図です。そのリアルな見通しというか、シビアな見通しについては中嶋さんの本を読みながら勉強させてもらってやっぱりこうなるんだろなあと思ってた(笑)。こんなおめでたい真つ最中に物騒なこといな、というわけで、この議題はさんねんながら秘書長によって却下されましたが、通訳の朝鮮人の中国共産党員の韓さんが、ボル・ポトのカンブチアは「私たちより左でして」とさかんに首を振っていたのも忘れられません。僕は今でも悔い改めてないプロ文革支持者なんで、どこで敗北せざるを得なかったかの総括を自分なりに深めつつげざるを得ないけど、ただ事の当然として中国革命については当事者じゃないから「支持者」、つまり外側のファンであるというところからいつまでたっても脱しきれないところがありますね。先見の明なんていうのはどうだっていいことだが、いまの開放体制の特別区という新しい租界の問題でも、その租界からうまみを吸い上げているのは、アメリカや日本の多国籍企業ですからね、けっきょくはむしろ我田引水の問題として扱えていかなければならないわけですが。

深川の「時は金なり」を解放軍の老兵士が

見て、自分はこういうことのために草を食み野に伏し山を越えて二十年間頑張ったのかと泣いたという話があるでしょ。僕はその老兵士の感慨には根拠があるという感じなんです。僕から見れば鄧小平路線は多国籍企業と結託する投降路線なんだけど、歴史必然的に要請されている四つの近代化には当然両義的なところがある。その路線の中で、近眼になってもノイローゼになっても肺結核になってもみんな頑張って働いて死んでいつてるんだろなあとという感じと、しかし、老兵士の嘆きももつともだということだね。

僕がいま住んでいるところは藤沢という三十万くらいの小さい町なんけども、この前主婦たちが集まってレーニンの『帝国主義論』の学習をやっていたわけ。そこへ日本留学中の中国の主婦が二人来て——鄧小平によって選抜されたエリート党员でしょうね、日本の大学で一人はコンピュータ、もう一人は言語学をやっていた——そうしたら驚いたことにレーニンとか『帝国主義論』とか全然知らない。僕は共産党のエリート党员だからと思つてとりわけ念入りにドギツク講義した。

小田 わざとやったんだろ(笑)

いいだ そう、わざとやったわけ(笑)

中嶋 文革中も紅衛兵に『共産党宣言』知ってるかって聞いたら全然知らなかった。

いいだ そうですか、とにかく『帝国主義論』を全然知らなくて、今の講義は国際政治の話のようでしたがなんて言うんです。そのあと交流会になって、日本の女たちは、自分たちはコココーラを飲むのをやめましたと言ったわけだよね。中国のエリート主婦の報告は、私たちはようやくコココーラを飲めるようになりました(笑)。そのズレはお互いに自覚している部分と自覚していない部分があるんだけれど、にわかには解けるような問題じゃない。あなた方は先にたらふく飲んじゃって、自分らには、毒だ、毒だ、飲んじゃいけないというのには聞こえませんが、という感じがあるね。我々が先まわりして近代の楽しみや苦しみ味あわせないぞというのに向うの人たちにとっては余計なおせっかいでね。和尚さんの水あめと小僧の落語のような話だけど、近代化が毒だというのはジャパン・アズ・ナンパーワンの一種のぜいたくでもありうるのですね、そういう問題があると思う。

今田 第三世界全部にね。

いいだ そう、第三世界に通底する問題なんだよね。

小田 今田さん、現在の状況を話してみてもいい。

今田 今「やわらかい中国」というのを夕刊に切れ切れて連載してらるんですけど、その中でコーラをとりあげたんです。コーヒーとビールとコーラが食における近代化のシンボルになつてらるんですね。つまり外国の擬似体験みたいなものです。それを飲める場所が合弁で建ったホテルでして、今は中国人も入れるようになってらるんです。そこへ行ってソファに座ってコーヒーを飲みコーラを飲みビールを飲むというのはまさに近代化のシンボルですね。

僕は中国は趣味という形でつきあつていた。それがいつのまにか仕事になつちやつたとまどつた時期もありましたね。あんなに目茶苦茶だと言われていた国が、毛沢東という人が出たために一つにまとまつて、しかも資本主義より進んでいるといわれる社会主義体制になつちやつた。これは面白いなと大学の時に思つたんです。あくまでも毛沢東という個人に関心があつたということなんです。それともうひとつ中国語をかじつた時に、漢詩を原音で読みたいなというのがあつた。社会主義とか革命とかいうところから入つたんじ

やなくて。その当時の仲間というのはみんな主義や思想がらみで入つたんですね。

いいだ 詩吟から入つた(笑)

今田 ええ、僕は本当に詩吟から入つたといふか(笑)。それで卒論を書く時に、中国に派閥はないんだろうか、現在の指導部はどうなつてらるんだろうかと思つたんだけど、当時誰に聞いても知らない。新聞社ならよく知つてらるだろうと思つて行つたら、せせら笑われまして、今ごろそういうのがあると思うのか、革命第一世代には絶対ないと言ふんです。あとで、お前は文革を予言したと変な言い方をされたんですけど(笑)。西側の政治学で言えば二人いるところには権力闘争がある。中国の社会主義ではどうなんだろうという関心もあつたんですけどね。

小田 東側の政治学ではもつとあります(笑)

今田 まあ、そういうところから入りましたので、ロマンみたいな形の中国とのつきあいだつた。特派員として行かされたのがちょうど中国が対外開放政策を決定して、スタートした時期だつたわけです。これは自慢してもいいと思ふんですけど、「資本主義的手法を使い」なんてのを新聞に最初に書いたのはたぶん僕だつたでしょうね。八四年の全国人民

代表会議で趙紫陽の報告が出た時に、これはすごいと思つた。八十年ぐらいに、財界の方

が中国もこれから資本主義が始まるぞという感想をもらされたんです。何が資本主義なんだろうとわからなくて、それが根にあつた。心情的には文革に加担していたので、なかなか素直に見られなかつたんですけど、どう見てもこれはそうだろうと。その目で見えていくとすべて解決がつくみたいなね。中国は我々がたどつてきた道をたどろうとしてらるんだ、そういうことならば私たちも何がしかの批判なりはできますよと書いたことがあるんです。それまでは我々の経験しない社会主義と文革という形を歩もうとしているんだから、我々がおかしいとか言ふのはおこがましいんじゃないかと思つたんですけどね。

具体的なことで言ううとそれこそいろんなことを経験したんですが、願わくばあと一年いたかつたというのがあるんですね。やつと庶民の意識構造が変わり始めて、庶民のレベルまで現在の路線が下りてきた時点で私は帰つてきやつた。資本主義みたいなところへ向かう路線がある種完結するのが八五年じやないのかなという感じがあつた。で、その最後の部分を自分の目で見られなかつたのが、非

常に残念な気がしてます。

コカコーラと鉄条網

中嶋 さっきのコーラの話ですが、実はコカコーラというのは中国に非常に前から入ってるんです。僕は一九三〇年代の貴重な写真を持ってます、日本の陸軍隊が上海バンドを行進していく背景にコカコーラの大きな看板がうつってるんです。当時は上海の特権階級しかコカコーラを飲めなかった。それが現在一般の民衆のところまで届いたので、彼らが喜んでいっているのは確かにいいことなんだろうけど、それを丸ごと肯定しちゃうと、では中国革命はなんだったのかということになる。

いいだ その通りです。コーラで言うと、僕自身はコーラをすごく好きだったのよ。アブレ・ゲールのはしりである所以は「ギブ・ミー・チョコレート」からはじめたということですからね。ナウい、シビレルという感覚でもって飲んでたんだけど(笑)、ベトナム反戦運動をやっている時に、向うからジョン・バエズさんがやって来て、対談をやったんだが、自慢そうにノド越しのコーラを飲んでいる僕を彼女がジロツと見とがめて、コーラ

というものがいかに悪いものかということをごんごんとやられたわけよ。何でも一晩置いとくと釘も溶けちゃうなんていつてたな。それで、実験はしてみなかつたけど僕は自己批判して(笑) コーラやめたんです。ついでにタバコまでやめてしまった(笑)

中嶋 僕は信州の松本ですけど、英語のテキストでコーラというもの読んで、早速喫茶店行って聞いてみたくて。なかつたんですけど、コーラを飲むというのは我々にとっても憧れだったんですよ。

小田 高村光太郎の詩にコーラが出てくるよね。僕はアメリカ合州国にかなり早い時期に行行って、いやというほど飲んだからもういい(笑)

中嶋 僕は「コカコーラ・イン・ベリアリズム」という言葉を使ったことがあるんだけど、社会主義が次々にコーラに汚染されてくるというのは非常に象徴的だと思うんですね。かつてソ連から東欧をずつとまわったことがあるんですが、ソ連にはコーラに近いものがある。で、ワルシャワに行くとホテルで飲めた。チエコではショウウィンドウに飾ってあった。ユーゴにはコーラ工場がある。これはつまりいかに西側化しているかというメルクマール

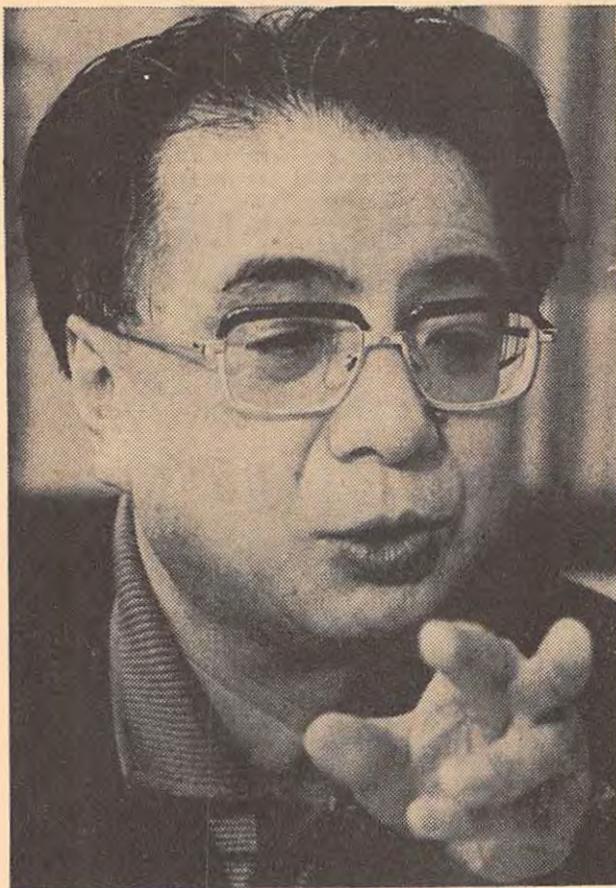
でしょう。そういう意味で中国にもコーラが出てきたんだなと思うんです。

今田 コカ・コーラが出る前にも、中国製コーラがあった、「幸福コーラ」といつて。でも、若い人がそんなに好んで飲んでいたらいい。今回のコーラは、飲む側の意識がまるで違っているんですね。

中嶋 僕は中国革命に共感して中国を目指した世代ですが、かなり早い時期に毛沢東に疑問を持つようになった。それで見てると、文革初期に中国へ行つて、これはもう党内闘争の大衆運動化であると思いました。

いいだ 派閥的な権力闘争であると。

中嶋 ええ、それには迷いはなかつただけで、毛沢東が「貧困のユートピア」を求めたという問題の中には我々も考えなくちゃいけないものがある。しかし、それにしてもあまりにも文革の現実とは違うじゃないかという思いがあったですね。しかし、今の中国にとつては近代化のために伝統社会をどうやって作り変えるかという大問題があると思うんですよ。今こそ本来の文革が必要なんです。ところが今の中国の指導者には全くそういう意識がない。「文明」という言葉も非常に安っぽく使い始めてますよね。なんでもちよつと



いいだもも

しとやかにやるのが「文明」だと。文明的に運転しようとか。

いいだ 道端では立ち小使してはいけないうかね。

中嶋 そうそう。それが「文明」になっちゃつてるでしょ。そこにも革命中国の墮落があ

る。それはひとつには文化大革命で手垢のついた「文化」という言葉に対するアレルギーもあるんでしょね。だからますます救いがなくなってきた感じがある。

小田 それをこれからの中国はどうなるのかという視点で考えたいと思うんですよ。

紀元二千年を目標にしてG N P千ドルと云うけどそれは達成すると思うんですよ。その次に何をやるのかということですね。

資本主義になったとかいうこと以前に、私たちの国にひっかけて言えば、富はある程度達成して、それで一体何をしたいのかわからない状態に来てしまっている。中国もその次に何をやるのかという問題に達着するだろうと。資本主義とか社会主義では解けないような問題になってくると思うんですよ。今のところ庶民は金をもうけてコカコーラを飲むという目標がある。紀元二千年でみんながコカコーラを飲むところに達するでしょう。それは通過せざるを得ないと思うんですよ。その次に一体何が出てくるのかというのが第三世界全体の問題なんです。資本主義、社会主義をどう定義するのかという問題も出てくるし、社会主義が中国にないとすれば、一体何なのか。そんな感じが私はしてるんですよ。

中嶋 二千年にG N P千ドルというのはあまりにも低いですけど、達成してもらわないと困りますね。しかし、千ドルを達成しても他の国々との大きな格差が出てきて、中国は南北問題の最大の対象国になりはしないかという戦慄を感じます。そうならないために今

の転換期は非常に重要なのであって、もつとステディにテイクオフしなければだめです。

一般的には一人あたりGNPが二百五十ドルから三百ドルですね。そこへ急にテレビを売り出してでしよ。毛沢東時代に社会主義的なテイクオフの基盤を作っちゃえばよかったけどできなかった。その空白は今後の中国にとって大きな問題です。しかも、僕なんかの尺度で言うと、GNP二千ドルになって初めてある種の社会的な安定ができるわけですから、それまではまだまだ中国は揺れるだろうと思います。その場合に、中国がもう一度毛沢東時代に戻ることはできない。それだけに今後の中国の進路をめぐっては、非毛沢東化と「四つの現代化」というコンセンサスの上での激しい角逐はありうると思います。このまま一筋縄ではとても行かないと思いますね。

いいだ 二十一世紀初頭へ向けてイギリスに追いつこうという生産高四倍増のキャッチアップ路線は、小田さんの言うように順調に行った上でその先の問題という形で問題が出てくるんじゃないかと、その過程自体で、つまりこの世紀末の中で問題が必ず噴射するというふうに僕は考えるね。深圳は深い田のあぜの

溝というような意味でしょうが、そんなところが中国一の近代工業基地になるといのはいわゆる滄桑の変を上廻るわけですね。そういう形になる中で、非常に深刻な裏面史が深圳の近代史の中に出てこざるをえないでしょう。

僕は華国録クレーターの後すぐに、華国録体制は長続きせずに、鄧小平体制にとつかわられるだろうという見通しの論文を『季刊クライシス』の創刊号に書いた。あの時の華国録路線はもつと野心的な工業化プランを出したでしよ。僕は現代資本主義の方の分析家としての立場から、その路線は全部すぐ破滅すると分析したんです。というのは、帝国主義国家や多国籍企業と結合して巨大な資本導入してそれを上からやろうとすれば、借款に引き当てをするものは中国には石油と農産物しかないわけです。華国録が基盤としていた大慶派と大衆派の足元がそこで崩れちゃうわけだから、自らの墓穴を掘ってるようなものだというのが、一点。それからもう一つは、華国録は世界資本主義がドルショック、オイルショック以後は完全に長期不況に転化していることを把握していない。折角外資をあてにして野心的な計画をたてても、その連動の

ところでバンクするよね。果せるかな華国録体制は崩壊したわけです。

今日、世界資本主義、多国籍企業との関係で経済特別区ができた。とくにアジア・太平洋時代にふさわしく、太平洋沿岸区に十七カ所ですか。これはどう言おうと租界であり、フリートレードゾーンですね。フリートレードゾーンで接合すると、資本制世界市場と連動するその変動次第になりますから、中国の変質過程に大きな加速力が与えられざるを得ない。それと、中嶋さんがおっしゃったように必ずそこで低賃金で働いている人がいるわけです。台湾の高雄暴動はフリートレードゾーンだから起きたし、朴正熙が暗殺で倒れるきっかけになったのは馬山、釜山の蜂起でして、これもフリートレードゾーンですね。多国籍企業との接点になってショールウィンドウだと言われているところが人々にとって苦しみが累積してるところだという感じがある。だから、順調に行きっこない。

にもかかわらず、鄧小平が今のような商品経済化の路線を出さざるを得ないというのには、台湾、香港との関係ということがあろうと思うんですよ。イギリスの没落過程に乗じて、一九九七年に香港が還ってくるわけです。香

港は資本主義的に非常に繁栄しているし、世界資本主義の長期不況の中でも経済成長十%以上ですね。それだけ急成長している資本主義のシステムを持っているところをどう対抗しながら取り込むかということにならざるを得ない。

そこで鄧小平路線は理論的には二つに集約されると思う。ひとつは計画化された商品経済、それが資本主義かどうかというのは厳密な検討が必要ですが、商品経済国であるというのとは間違いはない。

中嶋 一種の国家資本主義ですね。いいだ そろですね。二番目は一国家二制度で、ナショナルリズムの中に資本主義と、社会主義と自分で思っている二つの制度を共存させて包含するという事です。香港とか台湾の方が、計画化された商品経済というカテゴリーで言えば、「社会主義制度」より全く成長度が高いんですから、結局は自分の方が包含されてしまふ。

つまり、ひとつには、特別区を通して多国籍企業が石油と農産物を引き当てにして浸透してくるから人民公社も当然解体される。もうひとつには香港と台湾を抱え込んで、それとの内部競争という形になったら、自分の方

が包含されるという状況をどうやって越えるかということで、これは万里の長城なんかでは防げませんよ。鄧小平としては過激な商品化路線を出さざるを得ない。

中嶋 今度、台湾、香港、深圳、澳門とまわってきたんですけど、深圳自体についての一般の新聞報道は間違ってますね。そう急速にテイクオフしてはいない。ただ、新しい建物が次々建っているに過ぎないですね。インフラストラクチャーは全くできていない。ひずみがあるのすごく大きいにもかかわらず、やがて香港を吸収し台湾との統一をはかるという戦略的プログラムがあるんですね。

だけど、実際に見ると深圳には香港の影響が圧倒的ですね。深圳はもう完全に香港ドルの世界で、人民元は誰も見向きもしないといった感じですよ。香港は片輪な発展をしていて、いわば砂上の楼閣みたいなところがあるし、香港ドル自身が弱い通貨ですよ。ローカル・カレンシーです。香港ではたまたまお金はみんな米ドルで貯金しますし、香港の為替取引の大部分は米ドルです。今の世界にはドル、円というレベルと、香港ドルというレベルと、中国の人民元のような第三世界的なレベルがあって、その格差がものすごくある。その香

港ドルでもそれほど影響が強いということ、中国全体の経済レベルがいかに脆弱かということだと思えます。この中へ日本の企業が一齐に出て行けばたちまちのうちに中国市場を席巻しちゃうかもしれない。鄧小平が考えていることは、香港と深圳はやがて一体化するだろうから、それを自分たちの主導権で運営するんだということでしょうが、僕はそれは行かないと思いますよ。

そのことがかなりわかっているからこそ、第二国境線を作っているんです。鉄条網を張って電流を通して、税関と警察とで六カ所検問所があつて大変なものを作っています。やはり、深圳は非常に大きな問題を中国社会につきつけているんじゃないかという気がしますね。

今田 僕が深圳へ行ったのは、二年半ぐらい前です。写真真に基いて、基盤整備中、つまりハードを作っている最中で、ソフトはほとんどない。日本の企業を歓迎する、どうぞ新聞に書いてくれ、ということですよ。話を聞くうちに、日本も期待されてはいるが、どう見ても香港が第一、目は香港に向いている。中嶋先生のお話のように、第二の国境線を作っているが、これは、香港との国境を数十キロ

中国大陸側に後退させることだと思つた。

それから、びっくりしたのは、日本企業関係者の話をきいていると、日本側の情報がいれば競争相手になる香港企業に筒抜けになつてゐるらしいということです。当時は、詰めた話が進んでるわけじゃないからいいが、条件など提示しあうようになると、あるいは進出後であつても、情報が抜けていくというのでは、安心できないなんて話してました。そりやそりでしよう。『産業スパイ』の群れの中に入るようなもんですから(笑)。特別区をとりまく大状況は、中嶋先生もおっしゃつたようなことだと思ふけれど、小状況としては、また、いかにも前近代的な中国社会の遺物が顔を出していますよ。

小田 「特別区」というのはたくさん行きました。目玉商品だから連れていくわけで、珠海も深圳も廈門も行った。彼らは日本企業是非来て下さいと書いてはしかなかったから連れていったと思ふんだけど、日本の企業はそんなに甘くはない。行つて元も子もなくなつたら困ると思うから、出てくるのはちつぽけなものだけだ。珠海の特別区に行つても何もありませんよ。日本企業が進出すると言ふから行つてみたら、ティッシュの箱を作る機械が

一台あるだけ。それだけで大トビツクみたい

に連れていく。外国企業をちよろいと思ふ面とあまりにも過大評価してる面と二つあると思ふね。特別区作つたらみんな来よと思つたら、どっこいそうはいかない。鄧小平がひつくり返つたらどうなるかわからないという

危惧が強いと思ふんですよ。

それと、あちこちで人々としやべつてみてわかつたのは、日本とのつきあいが戦後なかつたから、日本を知っている人たちが二種類に分かれてるんですよ。戦前の日本を知っている人、たとえば中日友好協会の幹部のように日本に留学した人たち、それから現在の日本を知っている人たちですね。途中が抜けてるんです。だから、ピカピカ光るトヨタの自動車を見て感心して、あつという間にできてるんです。日本企業が試行錯誤してやってきましたという過程を全部抜かしてますからね。ジャンプしたらすぐできるというような感じを持つてると思ふんです。しかし、なかなかできないというようなことが今だんだんと出てきてるんですね。せつかにモデルを作ればいいんだというのが今の中国の大きな問題のひとつですね。

手ぬきの社会主義?

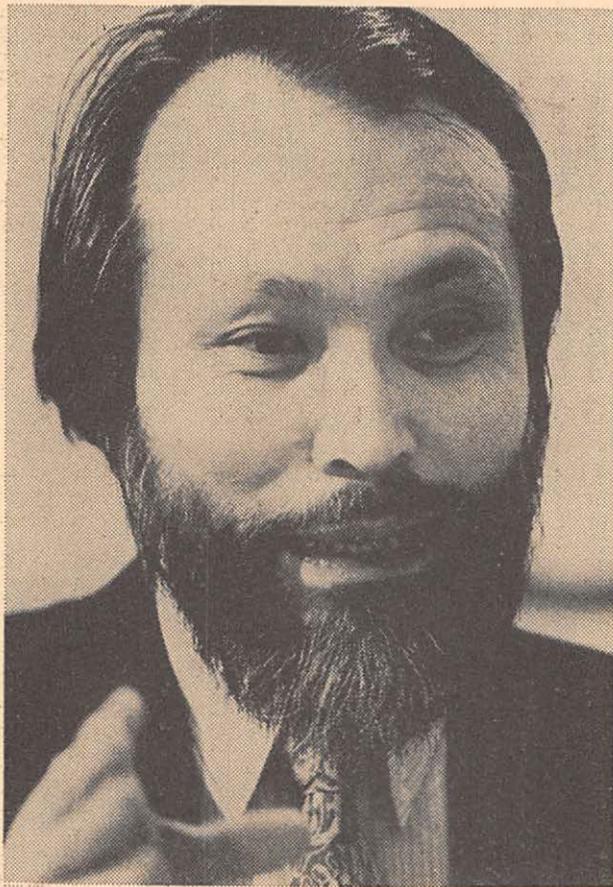
今田 深圳は、中国が目標としてゐるGNP千ドルを去年の十二月ごろに突破したんですよ。深圳は中国がGNP千ドルとなつた時に一体どうなるのかという典型のような気がするんですよ。大変な格差がありますね。

小田 中国全体を半年まわつてみて、それはたいへんな格差なんです。貴州省なんか行くのと、驚くべき現実が存在してたですよ。長征のあとをたどると第三世界そのものだね。

いいだ 今の鄧小平路線が格差を埋める方向に行くのか広げる方向かと言えば、間違いない広げる方向だと思ふね。

中嶋 間違いない広がってます。

小田 ただ、それは鄧小平路線を拡大しただけであつて、中国革命全体がずっと持つてた問題だと思ふんですよ。大きく言えば、今第三世界と先進国の関係が中国の国内にどかつとあるでしょ。第三世界は自然資源を持つて、それを先進国側が機械加工するということだけど、大体貧しい州というのは自然資源を持つてるところです。中央政府が自然資源を手中に置いて、沿海地区で加工して第三世界にまわすということをやつてる。私がひ



今田野彦

どつ痛感したことは、第三世界側の自主権が非常に少ないですね。海南島の場合でも海南島独自の計画はたてられないですね。中央政府の直轄の部分も大きいし、中央政府と協議することもできない。そういう格差が出てきて個人の生活にもひびく。

中国の社会主義の特異性として、包括的社會主義がないでしょ。北朝鮮は全員飯を食わすとか、全員病院はタダであるとかをやる。中国の場合、学校は義務教育じゃないし、学校に行ったらお金がかかる。人民公社単位とか工場単位ですべてがまかなわれる。病院も

勤めてる人はタダだけど、子供は全部払うとかになつたりする。今、首切りが許されるようになってるんですが、失業保険も何もないですから、全部宙に浮く。クビになったら、包括的な健康保険はないからそれだけでもたいへんだ。一度単位を離れたらおしまいです。小説読むと借金してるといふのがたくさん出てきますね。病気になるたら借金をする。考えてみるとあの社会主義は手ぬきの社会主義だと思ふ。

いいだ つまり、企業内厚生施設しか持っていないんだな。

小田 そう。だから、日本の企業のことを言うとかあの国は一遍でわかる。西洋人に、共産体、共産体、共働体というのが日本の会社だと言つてもわからない。中国人に言うとうすぐわかるね。包括的な社会保障がなくて、それを人民公社なり工場なりに任せてしまつてゐるから、安上がりについてる社会主義だと思ふんですよ。

いいだ 企業福利があつて社会保障はない。今田 「寄らば大企業」なんですよ。昔は、観光旅行はなかつたけれど、〇〇訪中団で行くと、人民公社や工場などの参観がたくさんあつた。工場で、いまは企業なんだけど、話

を聞くと、小学校を三つ、中学校を一つ設けています、とか、病院や託児所もあります、とかいうわけです。また、それが自慢でもある。老後は退職時の七五〇の年金がもらえるという。この年金は、国が出すのではなく、工場が出してるわけ。そうすると、日本と同じになつてしまう。当時は、賃金は原則として全国同一だったから、まだいい。これからは、工場が日本的な企業体になつてしまふ。そうなれば、もうかる企業の従業員ほど恵まれることになる。僕は、感覚的に、これでも社会主義と呼べるのかな、と不思議に思った。小田さんと、北京でこの話をしたことがある。小田 単位からの首切りは大問題になつてきてるけど、それに対する包括的社会保障はやってないですね。文革の時、あるいはそれ以前から豊かな人民公社と貧しい人民公社、決定的な格差があります。たとえば病院にしても、豊かなところは払わないですみますよ。貧しくなれば貧しいほど金を払わされる。それは人民公社成立の時からある。貧しければ貧しいほど損をするシステムとしてあの社会主義が運営されていることは否めない事実ですね。ひとつひとつの単位が社会主義化されて、その集合体としてあるからひとつには強いで

すが、格差が発生する。その格差を是正するような社会保障を作つてないと思うんです。

朝鮮族の中国人が私にいみじくも言つたね、朝鮮には自由はないけど社会主義の土台がちゃんとしている。私のところは自由はあるけど社会主義の土台は無茶苦茶だと。僕は文革と今やつてゐることは根本的に違ふだろうかと、いう気さえする。文革の時にそういう問題の解決を少しもやつてないでしょ。格差という問題は今に生じた問題ではなくて潜在的にずつとあつた問題であつて、中国の社会主義の持つてゐる強みであり弱みであつた。今、それが裏目に出てきたと思ふんです。

中嶋 果して中国革命によつて中国に社会主義が導入されたんだらうかということがありますね。中国は農村共同体が非常に強固にあつてその中で角逐がある。お互いに武闘をやつた伝統がありますよね。そういうものの上に中国革命が乗つちやつてゐる。レーニンが社会主義は権力プラス電化だと言つたことの意味はかなり大きかつたはずですね。だけど、電化という面が全然なくて権力だけを共産党が握つたということ、社会主義の基礎が全然できてなかつたんじゃないでしょう

いいだ 小田さんが大きい問題を次から次へと提起してるんだだけだね。

日本でも大正ぐらいまではマツチを作つたり電球を作つたりしてたと思ふんだよ。後発資本主義は至みもあるけど、遅れて登場した者の特権とかある種の利便もある。だから、結局、そこから三菱化学とか松下電器とかできたと思ふんだよ(笑)。深圳というショーウィンドウだつて、たとえば二十一世紀に向けてということになれば、マツチ、電球だけのショーウィンドウではなくなるかもしれないという感じは一面では僕はあるんです。ただやはり多国籍企業との接合であつて、能动性は多国籍企業が握つてゐる。それによつて梓づけられて「中国社会主義」体制も変動を余儀なくされている。それを防波しようとするれば中嶋さんのおつしやつた鉄条網の万里の長城を作るといふことにならざるを得ない。にもかかわらず万元戸というような(笑)が必然的に出てくる。高度経済ですからね。人民的な計画——といっても実際は上からの国家計画ですが、それと商品経済というものは鄧小平路線の進展に伴つてこれからどんな矛盾した部分が出てくる。それと、一家二制度という形で香港から台湾まで包含し

て経済主義的な路線で未完の革命の問題を解決しようとするんだらうけど、その二制度自体の矛盾が激化せざるを得ない。それにつれて中国の本体の中でも南北問題が激化される。概念化すれば僕はそんなふうには世紀末の中国を見通すれ。

小田 だけど、その南北問題というのは文革の時もあつたわけだね。

いいだ そうそう。プロ文革は結局そこを解けなかつたわけだけど、志というところで言う、精神労働と肉体労働の差異、都市と農村、工業と農業の差異を超えるというスローガンを出して、格差をなんとかして克服しようということがあつたわけです。格差は格差のままでもいいとか、格差をそのまま(◎)にたつてもいいから前へ進むということではなかつたと思う。

うまく小田さんが指摘して中嶋さんが補充したように、社会主義で我々が解けないのは、「すきま」問題というやつです。企業と企業、すきま、農村と農村のすきま、それを何によって社会として連合させるのかという問題です。毛沢東のプロ文革では、十大関係論が出され、継続革命の大衆の力に依拠しようとしたわけだが、現実にはすきまを埋めて格差を

是正するのは官僚の力だね。法家路線だろうね。権力の力によって埋めるんだというところで四人組もバンクしたわけだ。そのあとの鄧小平路線というのは商品経済の力によって埋めるというわけだよ。僕はどっちもだめだという意見だね。僕なんかの持つてる社会主義というのはどちらでもない。小田さん、中嶋さんの発言で「すきま」の問題はずっと続いているんだということはその通りだと思ふ。

しかし、権力によって解決するのか、商品によって解決するのか、革命によって解決するのかという三通りがある。

小田 いいだ理論は革命によって埋める？

いいだ そう。

小田 文革は権力によって埋めようとしたわけだ。

いいだ 四人組はね。

小田 四人組に限定するわけ？

いいだ まあ、そこは難しいんだ(笑)。革命によって埋めると言うけど、毛沢東のスローガンに「革命をつかんで生産を促す」というのがある。これがうまくいかなかったからこそ敗北して挫折した。言葉で言えば「革命をつかんで生産を促す」んだけど、どういふことが具体的にそうなのかというのは難しい

問題だと思ふ。特に、アメリカ型生産力との対抗関係でそれをやらなきゃいけないからね。核、自動車、電機製品、半導体、みんなアメリカ型生産力の産物だ。

毛沢東と中国の民

小田 文革の話をしてみたいんですが、ひとつには文革は近代的工業国家を否定してないと思ふんです。毛沢東は一九四九年、北京解放の前夜の西拍坡会議で大宣言をしています。我々は方向転換するんだ。今まで方便として

農村を使ってたけど、これからは本命である都市中心だ、大工業国家を建設するんだとね。大工業国家を建設しない限り、生産力を高めない限り、社会主義なんかあり得ないんだと高らかに打ち出しています。その通りやろうとしましたね。近代的工業国家の建設が絶対命題であるとして、農村と都市の間の格差なしにやっていくために、農村を都市化していく、あるいは都市を農村化する、二者を結合する形で土のにおいのする近代的工業国家を作ろうとする。土法というのは生産力の補助機関として使う。使いながら人民の土着性があれば原爆までつながっていく。近代的工業国家の問題と農村の問題をくつつける。そ

ういうことを人民公社とか、工場公社で解くうとしたんじゃないかと私は思うんですね。それは一九四九年の解放以後根本的には変わっていないと思うんです。

原爆の開発だけは文革からはずしたし、軍隊の中核部もはずしたでしょ。文革の中ですでに制約を持っている。制約を持っているところから考え直した方がいいんじゃないかというのが今の考えです。

いいだ 寺尾五郎さんという僕の先輩がいて敗戦で治安維持法の獄から出てきたコミュニストで中国派の元老なんです。その寺尾さんがプロ文革の前ですが中国に行つた時に夜、汽車で走ると闇の中に点々と赤い炎が見えたと、あれはなんだと言つたら、土法によつて鉄を作っているんだと言う。大躍進をやっているんだということで感激したんだそうです。土法によつて鉄を作るというのは、志としては非常に感動的なものですね。しかし、それによつて近代の製鉄業によるいわゆるスチールはできっこないというのが当時から科学的常識です。毛沢東はそこで最大の問題につきあたっているなという感じがしましたね。なべ、かまみんな溶かしちゃった。どこ行つたつて鉄カスみたいのがころがってまし

たよ。妙な話に飛躍するようですが、『鞍馬天狗出生譚』という幕末の南部大一揆のことを書いたんですが、あれは僕なりの毛沢東の問題に対する応答なんです。南部の山中のたたら師の話でして、それが一度切れて、別な和蘭仕込みの開明派の手で釜石製鉄所が起される。そうすると、製鉄とか原発は近代もろとも葬り去るのか、それとも別な形であり出していくのかという問題になる。農業人民公社の土法製鉄では解けない問題だ。

小田 毛沢東はその点は二つ二つつけてやろうとしたんだろうね。原爆を作る技術と土法の距離がものすごくあるのに過少評価したんだろうね。でも、くつつかない。

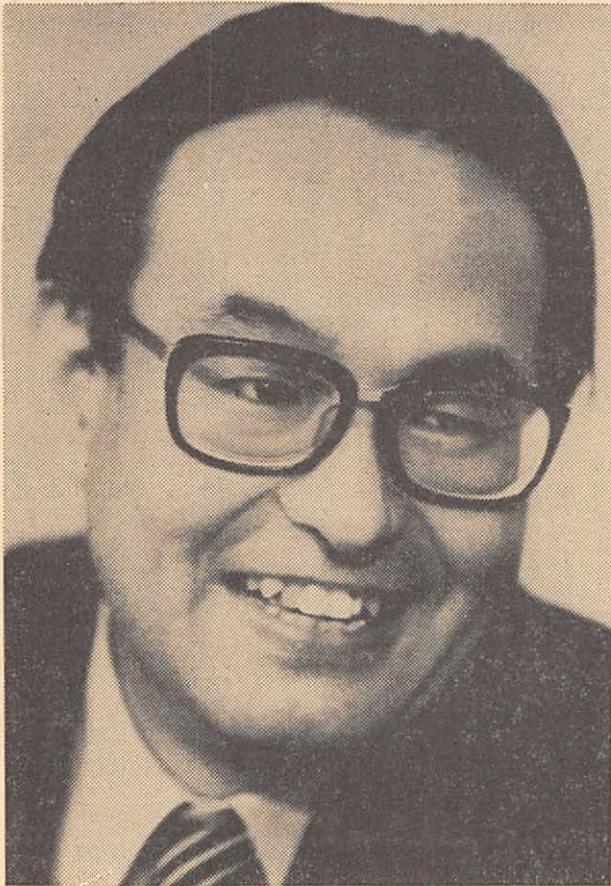
いいだ そう、くつつかないんだ。
小田 文革を入れなかつた部門に重工業部門がありますね。やるとえらいことになるし、ソビエト、アメリカに囲まれて軍事力を高くなきゃならない。文革はいろんな無理を背負い込んだ形で始まった。矛盾を背負い込んだ形で始まったのに、そうでないものとして始まったから大混乱に落ち入ったという気がするんです。

中嶋 毛沢東の土着主義への憧憬みたいなものがあつて、いいださんや小田さんもそこ

に評価を与えたいんだろうと思います。でも、社会主義というのは近代化のひとつのモデルですよ。社会主義からはきちんとした筋を作らなければならぬという要請が出てくる。特に軍事力の問題や原爆の問題がそうであつて、毛沢東における矛盾は土着主義を言いつつながら、軍事フエティシズム(物神崇拜)があるでしょ。これがひとつ大きく歪んだ点という気がしますね。

いいだ その点はホメイニの原理主義も同じ問題に直面しますね。

中嶋 ええ。それと、一種のカリスマ的な権力の問題が出てくる。社会主義というのはある種の大衆的な合議によるデモクラシーですよ。だがそれは権力とあいられない。それで、結局、毛沢東は自分と意見を異にするものを強権的に排除するという論理におち入っていきましてね。最後は自分の側近しか頼れなくなつた。ですから、私は四人組じゃなくて毛沢東を含めて五人組だと言っているんです。おそらく中国の一般の人たちもそう思っているに違いないと思うんです。彼が反近代とか土着主義とかを実験しようとする時に、常にそれに対する抵抗が出てくるでしょ。この抵抗はやっぱり社会主義の論理から出てくるん



中嶋嶺雄

です。毛沢東というのは言ってみれば、常に社会主義とたたかわなければいけなかったという矛盾があった。その矛盾を解消する手段として、カリスマ的な権力につきまとわれたところに毛沢東の悲劇がある。

もうひとつ、あまり論じられてないんです

けど、中国は今、整党をやっていますね。中国社会の底辺ではものすごく大きな社会的、政治的変動があって、文革に共鳴した人たちを排除しようとしている。ですから、出口のなくなった人たちは犯罪に走るとか、ハイジャックカーになるとか、一種の犠牲者になる。

結局、毛沢東自身の描いた大衆モデルが、中国の一般民衆の素朴な要求と合致しなかったんです。今の中国を見ると反体制派は全面的に抑えられています。毛沢東型社会主義の歪みが今でも続いているという気がします。逆に、ひとつの救いとして、鄧小平が権力を回復する七八年の三中全会あたりに出た「民主の壁」の壁新聞の言論には実に鋭い問題意識がありますよ。彼らの問題意識はひよっとしたら毛沢東を越えているんじゃないか。それが今全部抑えられちゃってる。

いいだ 僕は半分毛沢東擁護やりたいんですが、鄧小平路線が開放体制を敷くということとは、内における民主の抑圧を伴わざるを得ない。外への、つまりブルジョア世界への開放体制であるとともに内への一種の専制体制であるというふうに思います。魏京志はじめ中国の最良分子は今でも獄中にいるんだというのは僕の連帯の志ですよ。そこところが毛沢東からずっと来るんだと中嶋さんはおっしゃる。僕は格差がある限り、社会主義の志は達成されていないという意見でして、毛沢東路線の核心もやはり過渡期社会主義における継続革命の理論ですよ。その意味で革命は継続してるといふ見方が絶対必要なんだと依然

として思います。

しかし、すきまとか格差を解決するためには資本主義がのこした遺産の中でやっていくほかない。で、それはアメリカ型の生産力の処理の問題ですが、そいつは最初から問題になつてゐる。コココーラをエスキモーにも、ヒマラヤ人にも飲ませるといふ「普遍的」な消費様式の強制力を伴う生産力です。よね。ブルジョア国家の打倒という形で生産関係を変革した後に、こういう生産力、それを支えているテクノロジーをどういふに扱うのかというものが毛沢東路線が直面した最大の問題だつたんだけど、当然解けなかつた。それが今でも問われているんじゃないかな。

中嶋 そのすきまの問題だけど、中国社会というのは本来非常にすきまのある社会ですよ。このすきまの部分で中国の農民や民衆はうまく生活の知恵を生かしてしたたかに生きていっているところがあるでしょ。その部分を毛沢東は扱ってなかつたんじゃないか。彼の生産力と生産関係の議論はそうだと思うんですよ。毛沢東は初めから社会主義ではなくて毛沢東主義でも反近代主義でもいいからそれを前面に掲げればよかつたけど、結局、社会主義の枠組でいくと平等だとか福祉とか工

業化とかが出てくる。

しかし、中国社会というのはすきまです。あれだけ混乱があつても解体しないというのはまさにすきま社会だからなんです。ですから、毛沢東は中国社会の伝統的な要素であるしたたかな農民の共同体に足をすくわれたという気がするんですね。彼自身は農民とか土着とかを志向しながら、結局、それは彼の観念の遊戯ではなかつたかと。

小田 それはそうです。文革が農村にほど入つてなかつたというのは驚くべきことだつたな。文革はインテリの運動であつたことが一つの大きな限界だと思つてですね。反インテリを標榜しながらインテリの運動にとどまつた。毛沢東は発言権を求めて北京から上海に移動する。結局、遑うインテリに依拠する形で文革を発動する。若きインテリの卵みたいな紅衛兵を全部使う。あちこちでここは農村ですから文革は来なかつたというんですね。

今田 毛沢東は言葉では言っているんですけど、文革中に、三大格差の解消といつて。つまり都市と農村、労働者と農民、精神労働者と肉体労働者ですか。そのすきまを埋めるために「二結合」ともいつた。その一つとして、

知識青年、これが紅衛兵なんだけど、彼らの下放があつた。でも、実体としては、農村には届かなかつたんですね、文革は。

国家からひとりひとりの人間へ

いいだ。農村の人民公社と人民公社の間にすきまがあるだけじゃなくて、都市の大工業をどうしようかといふことだよ。それは上海の王洪文のはじめた三無工場も、紡績はできるけど重化学工業はできないという問題がある。当然、三無工場と三無工場の間のすきまをどうするかといふのが出てくる。向うに行つた時、北京で廖承志に、都市の人民公社をいつから始めるんだと言つたら、毛沢東主席がおつしやるには都市の人民公社は少なくとも二十一世紀になるまではやりませんと言つた。これはやらないという右派の答え方なわけだ。

それから、上海の革命委員会のおえら方と会つたんです。上海は近代世界の植民地大都市の典型であつて、もちろんその遺産がそのままのこつてる。僕は上海コミュニオン支持派で、それが毛沢東の一喝でつぶれたのは残念に思う、上海人民公社は好だけど、看板を「上海人民公社」にただ書き替へたつて、日帝が

占領した時の上海と同じで、租界が解放されただけだ、たとえば日本で遠い将来に社会主義をやる時、大東京をどうするかというのは最大の問題になるだろう、そういう問題をどうするつもりだと訊いた。そうしたら「大分散小集中」と書いてくれた。僕は太筋納得したね。今はともかく方向としてそういうことであれば好だと僕は言っただけです。だから革命派もその点全然意識がないわけじゃなくて、上海を一度解体しちゃって大分散小集中しなきゃいかんと。

小田 ボル・ポトみたいなのじゃないかね。いいだ 下手するとね。

中嶋 いいださんの言うこともよくわかるんだけど、毛沢東が上海コミニオンを抑えつけたでしょ。あの時点で毛沢東の限界が露呈しましたね。

いいだ 国家という問題ですね。中嶋 かりにいいだ理論でいくと、果しない内ゲバになっちゃうんじゃないかな。そこに権力の問題という一番のガンがあると思いませんね。

僕は毛沢東にも批判的だったけど、今の鄧小平はその裏返しなんです。その点で両者に対してかなりからいんです。もし、中国が

胡風まで復権させたら、僕は中国を認めたいと思います。その次の段階は百家争鸣の時に出てきたいろんな反対派、それから天安門事件。天安門事件については鄧小平はうまい汁だけ吸って権力の側にまわっちゃったけど、あの時の大衆の怒りを全然くんでないですよ。胡風というのは大変な文学者であって、周揚のような文化官僚は嫌いだった。それで、五十年代に堂々と社会主義リアリズム批判の意見書を出しましたよね。その時に鄧小平も、劉少奇も、毛沢東も一緒にあって胡風をつぶしちゃってる。だからその点では同罪ですね。こうした問題を中国は一体どう考えるかというところを見ると、やはり将来もう一度政治革命が必然化すると思います。

小田 中嶋さんのおっしゃったことは、中国のみならず全社会主義国で起こってることですよ。胡風のようなことをやれば必ずやられます。文学者いいだもがこれをどう解くかという問題が出てくるわけだな。

いいだ 僕はもちろん本多秋五さんと同じで胡風についてはイエスなだけだね。その手前の問題で、さっき小田さんの言ったプロ文革は農村に入らなかつたというのは、人民公社に依拠したにもかかわらず実態としてはそ

ういう面があると思うんだよ。僕の主観で言うところの問題がある。プロ文革というのは第二革命ですよ。第一革命の基本は土地改革だと思うんだよ。だから、プロ文革は土地改革の次の問題でしょ。土地改革をした農村が自らの力に依拠しながら、どうすればアメリカ型の生産力に拮抗できるような別な質の工業化と都市化をやることができるのかという問題が新たに出了たわけですよ。その問題は土地問題の時の運動経験では絶対解けない。僕は根本的にはそこが解けなかつたから入れなかつたと思う。

大寨に行った時、スプリングラーが回って、素晴らしいだろうと言うから、素晴らしいけどスプリングラーが回るには電気が必要なんです。電気はどこかで人海戦術で作ってるんですかととばけて聞いたわけ。杭州に泊まった日、杭州自体がプロ文革派と軍事管制派の内ゲバで大変だったこともあって、自動車で一日がかりの遠い発電所まで連れて行って、電気という形で僕は象徴的に言ったんだけど、大寨みたいな一番プロ文革が入ったと言われている所で結局この政合一の自治がかかえこまざるをえない本質的な問題は解けてないんですね。僕は都市の方から解体しな

きやいけないと思うけど、やり方を下手するとブロンベン解体、ボル・ポトだよね。

中嶋 社会主義を擁護するなら、その問題を解いてでじゃないと擁護できないと思うんです。僕はこれではダメだと思つたから、社会主義から離れたわけです。

いいだ 僕は解こうとする志で今、御勘弁願つてるわけ(笑)。それを解かなければアメリカ型生産力でもって現代文明は崩壊するんだから。核で爆発しちゃうんだから。エコロジカルな失調になるんだから。人間のアイデンティティそのものが解体しちゃうんだから。社会主義の悪口はいくらでも引き受けるけど、じゃあ今の資本主義はこのままでいいのかということがあるわけよ。

小田 そうだよ。我々はそれを問題にしてるんだよ。社会主義がダメだから万歳というわけじゃないんだ。

僕は大家行つて農民というろしゃべつたんだけど、豊かになって自由になつたと農民たちが言いましたよ。僕はその通りだと思ふんです。ただそれを聞いてて非常に辛い思いになつてくる。たしかに大衆の個人の収入は増えたけど、それはかつて無茶苦茶に労働して、蓄積をつくり出していたからでしょうね。

朝の六時ごろから夜中の一時、二時まで奴隷労働みたいなことをした。それで土台を作つた。土台を作つた上で自由化したから豊かだと思ふんです。ただ、その前に猛烈な労働をやつている。これは第三世界全体の問題だと思ふんですよ。ちゃんとしようと思つて、社会主義的な方策をとると、そこに必ず強制的な労働が伴い、言論の自由が弾圧される。そうすると僕自身にも責任が出てくるわけ。第三世界をそこまで追いつめた自分は何なんだとか。

第三世界はどういう方式で発展したらいいのか。一番てつとり早いのは資本主義の方策をとることだと思ふんです。どこかの国と結託してやれば非常に安上りにつく。安上がりにつくかわりに飢えたる民がわんさと出てくる。ちゃんとしようとすれば結局、自力更生しかなれないと思ふんです。自力更生しようと思つれば大衆みたいな問題が出てくる。

社会主義社会は社会主義的な土台は格差はありますけど多かれ少なかれ作つたと思ふんです。土台を作つちゃうと人間の欲望をインセンティブに使わないと経済は動かない。それで全社会主義国が市場原理を導入し、金も上げの原理とか入れてますね。社会主義つてのは人間にふさわしい原理なのかという問題

も問われてきてるんじゃないかと。いいだ 第三世界が近代世界の桎梏の中から解放されて自分自身が豊かになるためのモデルを毛沢東の中国が提供したかに見えた時期があつたわけでしょ。プロ文革がつぶれたということは、中国の社会主義の変質にとどまらず、第三世界の自力更生による前進モデルがつぶれたということです。

小田 毛沢東の文革がつぶれたからじゃなくて、全社会主義国がバラバラに同じ道を歩んでると言つてるわけだよ。資本主義の方も社会保障の原理を入れてやつてるから、お互いによく似てきてるんだよ。それぞれがそれぞれのやり方を入れながらやってきたというのが現状なんじゃないかと思う。それぞれが矛盾に逢着している。片方は市場原理を導入していくと社会主義が崩壊するんじゃないかと片方は社会保障をやると資本主義社会と根本的に矛盾する。だから経済が苦しくなると社会保障を切っていく。

いいだ 現状はおっしゃるようなことだね。論理化して言えばいわゆる収斂理論になるわけで、両方から収斂しつつあるという形で世紀末が進行しているんだね。

小田 収斂しているということではなくて、



小田実

どっちも矛盾に逢着しているという感じだ。中嶋 その場合に我々が考えなくちゃいけないのは、どちらの方がコストが高いのかという事です。僕は社会主義のコストはものすごく高いと思う。中国だってそれだけ人が死んでるかわからないですよ。それだけの

コストを払って社会主義を作ったけど、うまくいかない。そして資本主義を補完的に導入するということになるならば、果して社会主義を掲げるのがシンシアな革命家の態度なのかということが出てくる。そこで僕は社会主義はダメだとね。

いいだ そのコストを短期と長期にふりわければ、中嶋さんのおっしゃったのは短期のコストなのであって、長期に見れば資本主義のコストは人類文明にとって核爆発なんだから僕は非常に高くつくという意見ですね。

小田 個人個人の問題になると、新島淳良氏が、毛沢東は労働者一人一人のことをあまり考えなかったんじゃないかと書いていた。労働者階級全体を考えた場合に個人個人はどうなるかという問題、長期的展望の中で人間はどうするのかという問題が実は解けてないと思うんだな。

すきまに生きる人々

いいだ さっきの話に戻るんだけど、中国の民は王朝交代史の中ですきまを利用して生きていた。僕はその通りだと思うんだけど、同時に非常に寂しいんです。現代社会はアメリカ型生産力の発展でそのすきまもろとも全部が崩壊しちゃう時期が迫ってるんだから、そうなった時に、すきまを利用して世渡りしてるんですというだけの庶民の知恵では世界全体の崩壊に対してなすすべがない。そこが現代世界と王朝交代史が決定的に違うところだと思ってるですよ。これまでの王朝交代史の時

だつたら遊民や隠者になつて生きられるけど、今はアメリカ型生産力に追いつめられてるんですから。過去のこととしては承認ですけど現在はおちよつと立ち向わなければいけないと思うんです。

中嶋 そのへんが僕とちよつと違ふところだと思ふんですけど、中国に即して言えば、そのすきまはアメリカ型インベリアリズムで埋められはしない、それを越えるある種の豊かさみたいなものが中国民族にはあるような気がするんです。たとえばこのすきまを心理的にどう埋めてきたかという道教の世界ですよ。道教というのは儒教と違つて上下かみしもを着た秩序じゃないから、まさにレッセ・フェールであつて、彼らはそこに戻ることによつてお祭りをやり、四季の祝いをやつてきた。それを毛沢東が社会主義の原理でローラーをかけた。道教的な祝祭の論理が社会主義の国家にはなくなつてきた。そこに革命中国の悲劇のひとつがある。

いいだ 国家では出てこないですよ。だけれど僕の社会主義は桃源郷だからね(笑)。国家じゃそういうものではないでしよう。

中嶋 いいだもめ的な中国像からすると、いいださん自身の社会主義が出てくるから、ど

うしてもすきまを埋めざるを得ない、あるいは社会主義で埋めないと近代の轡車によつてすきまがなくなつちゃうんじゃないかとおっしゃる。

いいだ 僕の社会主義のイメージは全部すきまにしちゃうと言つてもいいですよ(笑)

中嶋 それなら若干わかるんだけど、先進国においてはすきまの中に山崎正和流に言えば柔らかな個人主義みたいなものが出てきていて、いわばアメリカ的なローラーでも埋められないものが育つてるんじゃないかという気がするんです。僕はそれを肯定するわけ。日本なんか見てもそうですけど、すきまの部分に資本主義的な近代化の論理を越えた一種の市民社会的な成熟があるんじゃないか。そこに僕はむしろ依拠したい。いいだ理論でいくと第三世界は当分の間待たなきゃいけないでしょ。第三世界のひとりひとりはずきまのところで過酷な原体験によつて犠牲にされちゃうわけで、だとすると長期的な展望では社会主義のコストは小さいなど言つていられるだろうか。そのへんが僕はいいださんの問題点だと考えます。

いいだ 二つ反論があります。コココラをふんだんに飲んでる北の世界に関しては、市

民社会の成熟という言い方はできるけど、やっぱりそれは大衆社会だから、腐つちやつていけるという感じがある。柔らかな個人主義のように見えた時期があるというところは否定しないけど、少なくともこれから先ということも考えていくと、柔らかな個人主義と呼ばれているものは柔らかなファシズムになつていかざるを得ないんだというのが一点。

それから第三世界にいつになったら千年王国が来るのかということですが、歴史の過程の中でどれだけの犠牲を背負うのかというのは計り得るものでもあるし、もちろん限度がありますね。その場合に、アジア、太平洋を最後の草刈り場とか楽園として殺到しているロン・ヤス枢軸時代の現代資本主義の経済的力能と結合して、上からかつての天皇制をもつと劣悪にしたような軍事的、官僚的な独裁をテコにしながら、西欧化、近代化、工業化を進めていくことはそんなに安いコストですむものだろうか。アフリカの飢餓もそういうことと関係なしに起きているというのは別のウソだと思ひますから。

中嶋 それはそうですね。

小田 すきまを埋めるものとして道教があるというのはなかなか面白いと思うんです。た

だ、少数民族がたくさんいるでしょ。これはひとつの大きな問題を提起してきているんです。文革の間でも解決しなかった問題だと思っ
うんです。イスラムもあれば道教もあって、中国自体が別の矛盾をかかえている。中国式に生きていくやり方は漢民族中心のやり方じゃないかという気がするんです。文革の間、一番阻害されたのは少数民族だと思っ
うんです。特に朝鮮族と蒙古族、これは猛烈にやられた。ものすごく排外的なものだった。その地域、社会の中で一番阻害されている異分子自身がいいという社会が一番いい社会だと思っ
うんだけど、文革の場合はそう言えなかったんだよ。中国社会がたくさんの民族を包含していくのに中国古来の伝統でうまくいくの
だろうか。道教でうまくいくのかということがあるね。もうひとつ違う市民社会の原理を立
てないと、土着社会の延長線上では異分子は必ず阻害されてしまっ
たらう。社会主義の形をとろうと資本主義の形をとろうと、必ずやられるというのが私の感じ
です。

そこで今田さん、少し話をして下さい。

今田 社会主義にしろ何にしろ国家が前面に出てきますよね。文革が解決するのかもしれないと思っ
て見てたんですが、報道のあり方

が問題かもしれないませんが、権力闘争として報道してきた。これでもやっぱりダメだと思っ
ちゃったんです。社会主義がどうであろうと中国のひとりひとりがどう生きているの
か、一番関心があるって、向うの人とはひたすらそればかり話
してた。そこでは社会主義がいいかとか悪いかという問題はもう出てこ
ないです。文革の時どうだったかという話を聞くと、いやあひど
かったと言われる。全員を前衛にするよ
うな運動であったと言われてるけど、外にいる僕らは前衛に近
いんですよ。だから素晴らしい運動なんじゃないかなと思っ
ちやうど。ところが中にいた人たちの話を聞くと全然違っ
た。昨日まではあいつらと戦って負けてたけど、誰かが外から
応援に来るとそれに乗って連中をやっつけて、自分たちが
大きい面をするということをやったと言っ
てた。指導者はどうだったか知らないけど中で加わってやら
された人たちの多くはみんなそういう形
でやってたらしい。だから『帝国主義論』を知らない
なんて当り前なんです。我々はたまたまそういうのを知っ
て文革はこういうもんだと外で解釈し
ちゃった。それが向うに行っ
てわかったんです。

なるほど、すきまと言っ
たのかと思っ
たんですけど、僕はま
さにすきままで知恵
で生きていた人たち
を見てたんです。僕
らが恐くてしよう
がないことをあの
人たちは平気でや
る。たとえば公安
があるから、我々
とのつきあいは非
常に難しい。僕
の方から彼らに
対して寄っ
ておいでと言
いたいけど言
えない。向う
から来てくれる
人と話すとい
う形しか僕
としてはでき
なかった。記者
の中には自分
からアプロ
ーチしたた
めに、相手の
人が犠牲に
なったとい
うのが随分
あるんです。そ
れが厭だ
ったものだから向
うから来る
人だけでや
ろうと。そ
うすると、あ
の人たちの
知恵のあり
ようが見
えてくるん
です。ちよ
っと上が
ゆるむとい
うことになる
と、スー
っと僕のと
ころに来る
わけです。何
を言っ
たかとい
つたらタバ
コを買っ
てくれとか
外貨券替
えてくれと
かね。非常
に細かいこ
とを言う。誰
が言っ
たかとい
つたら、共
産党の団員
とか党員と
かそういう
人たちが
言っ
てたわけ
です。も
っと上の
方の人
に何か買
ってくれ
と一度言
われたこ
とがあ
って、買
ってき
て彼に
渡せば
人民元
が来る
と思っ
ていたら、
違っ
たんです。
あるレ
ベル
から上
の人
になると
ちゃん
と外人
しか使
えない
外貨券
が来る。
僕
が個人
的に
尊敬
する
素晴らしい
人
なんです
けど

ね。その人たちは特権が享受できる形になっ
ちゃってるんです。文革とは何だったんだら
うかとすぐ思っちゃいますね。

いいだ 知ってしまえばそれまでよ、知らない
うちが花なのよということですよね(笑)。
上海に現にそういう革命結社が生まれたこと
があったんです。「知ってしまえばそれまで
よ、知らないうちが花なのよ覚」っていう長
いやつね。

小田 いいださんの社会主義もそうか(笑)
いいだ そうだよ(笑)

毛沢東さん御苦労様

小田 毛沢東そのものについてだけど、文革
にからんで毛沢東と四人組を分けて考えると
いうことをいいださんはちよつとおっしゃっ
たでしょ。中嶋さんは連続してると思うでし
よ。

中嶋 まあ、そうですね。

小田 僕も連続してると思うんですね。毛沢
東の姿勢の過程としてそうなっていくだろう
と。そういうところは今田さんどう考えます
か。

今田 僕は、中国側の言い分に非常によく表
われていると思うんです。文革を全部否定で

きない時は、文革はよかつたんだけれど、四
人組が悪くしちゃつたという言い方をしま
したね。そうじゃなくなつた時点で、四人組
も文革そのものも全部否定するという言い方
しましたね。これで一応つなごてるんだな
あとと思うんです。ただ面白かつたのは、編る
直前に大衆に行ってきたんですが、あそこで
は使い分けてますね。文革の時やつたことは
よかつたんだと彼らは言ってます。中央の指
令に従つて一所懸命働いたのを利用したのが
四人組だと言う。僕は久しぶりに四人組が文
革と切り離された悪玉として聞いたんです。

で否定しているところに救いのなさがあるん
じゃないかという気がするんです。ポジテイ
ブな原理じゃなくて、一遍引き下がったネガ
ティブなところに僕は救いを求めたいわけ
です。それ以外にないなあという気がする。

小田 ちよつとお伺いしたいんですけど、さつ
き毛沢東が懐しくなるとおっしゃつたでし
よ。毛沢東そのものはどうお考えなんですか。
土着的な道教の考え方、ネガティブな考え方
と、毛沢東のポジティブな考え方の関係もち
よつと考えたいと思うんです。

中嶋 毛沢東が懐しいというのは、オール文
革否定になつちゃつて、いいださんみたいな
人が少ないからそれでも困るなあというふう
に思うわけ。毛沢東の中にもいろんな要素が
あつたんですけど、毛沢東の考えたポジテイ
ブな要素でがんじがらめになつちゃつて、そ
のために毛沢東自身が空中分解してるような
気がしますね。

小田 毛沢東がなかつたら中国革命はありえ
なかつたですか。

中嶋 そんなことはないと思います。

小田 いいださんは毛沢東がなかつたら中国
革命はありえなかつたと思うわけ？

いいだ 毛沢東なければいけないでしょう。我々

が見たような中国革命はね。別に僕は指導者崇拜じゃないけれど。

小田 それはコストの問題はあるよね、猛烈に殺してるとか。それと大衆のようにいろんな苦しい思いをして今まで来たとかね。そういう問題に戻るんですけどね。

話がとぶみたいですが、インドというのは過激なことはやらないで延々ときているわけですね。貧困は猛烈にあるし、土地改革はいかげんなものですね。そこんとこで中国と比べてみると、インドみたいになつたら中国はどうなつていたかという問題があると思うんです。もし毛沢東方式をとらないとしたら中国革命はどういう形でありえたかということはどうなんでしょうね。

中嶋 難しい問題ですけどね。中国共産党というのは毛沢東だけじゃなくて、いろんな個性がいましたよね。たとえば彭述之という人はトロツキストとして早い時期にバージされちゃったんですが、理論面で言えば彼はおそらく毛沢東と比べても遜色ない人物でした。当時の中国の状況からすれば毛沢東でな

くても、革命は成功したと思えますね。

小田 共産党主導じゃなくて、市民革命は不可能だった？

中嶋 それは無理でしょうね。

小田 共産党が指導する社会主義革命を目指すという方式しかなかったというところでしょうね。

中嶋 そういうことでしょうね。

小田 インドはそういうことをやらなかった。しかし、そのかわりに自由であると。私は中国とインドを見て考えるといつもジンレンマに落ち入るんだけどね。

中嶋 さっきのコストの問題だけど、最近インドの学者が、誇らしげに言うには、ついにインドは中国に勝つたと。かつてインドと中国は第三世界の二つのモデルだったでしょ。

小田 インドは今や一人あたりGNPは中国より多いと言う(笑)。それはコストの問題だね。

小田 しかし、それはカルカッタの路上に寝てる家なき人が言うことでなくて、安楽にいらしている学者の言う話だからね(笑)

今田 僕は向うで毛沢東バッジをちょうだい

とみんなに言うんです。そうすると毛沢東がダメになったあとですけど、持ってる持ってる、でかいのから始まって、アルミ、鉄、陶器、各種ある。毛沢東好きなのかと聞いたらやつぱり嫌いじゃないと。でも、これ持つてると文革のイメージがあるからいやだと言うわけです。じゃあ捨てればいいじゃないかと云つたら、これは捨てられないらしいですね。で、やつと友達の外国人にあげたということ、自分も納得して出せる置き場所みたいなものを得たと(笑)

中嶋 こないだ『フライデー』に、コメント求められたんだけど、そのバッジをパケツいっぱい集めてつぶして鉄を作ってる(笑)

今田 そうか、時代ですね(笑)

小田 ある若い知りあひと天安門広場に行つてちょっと酔っぱらってたんだらうけど、大きな声で、毛沢東さん御苦勞様でした、どうか安らかに眠り下さい、あとはやりませうかと云つてね(笑)

(原宿楼外楼飯店にて)

ヴィム・ヴェンダースは、映画史が同時代との不幸な行き違いの歴史であることを教えてくれる

「放浪三昧の映画」という総題のもとに、数あるロード・ムーヴィーを集め、日本で見られる限りのその代表作を上映するという試みがアテネフランセ文化センターで行なわれ、その初日の組み合わせがヴィム・ヴェンダースの『さすらい』と鈴木清順の『東京流れ者』という日本でのみ可能な二本立であったことから、数年ぶりで『さすらい』を見ることになり、この傑作を初めて日本に紹介したときにはまだ『時の絆のもと』という原題の真訳を書いていたことなどが思い出されて、あれはたぶん一九七六年の秋であったろうか、同じヴェンダースの『アメリカの友人』のバリ封切りの初日にかけて、その足でマレー地区にあるアート・シアター系の小さな小屋に『さすらい』を見に行った晩の興奮がまざまざとよみがえってきたのだが、ちょうど、東京を留守にしていたその間にドイツ映画祭が開かれていて、ドイツ映画という範疇

にはとうていおさまりがつかないヴェンダースの作品の汎世界映画的な風貌に当時の批評家たちがすっかり戸惑い、映画史的な知識を欠いたドイツ文学者の何人かが、『アメリカの友人』をめぐってまるで見当違いの評価を下して無知を告白していたことにひどく腹を立てたことなどが思い出されるにつけ、それまでも映画については発言していたものの、とことん映画につき合って行こうとする意志も希薄であった自分が、かなり本気で映画にのめりこむことになるきっかけとして、この時期に発見したヴェンダースやテオ・アングロプーロスやダニエル・シュミットを陰ながら応援し、彼らの作品が日本で公開されることはまずあるまいが、せめてその名前ぐらいは紹介しておくのがこれまで映画を見続けてきた者の義務であり、同世代人としての権利でもあると思ひ立ったという事実があるわけで、そう考えてみると、この秋に公開がきま

ったヴェンダースの『バリ・テキサス』の前景気を煽る意味も含めて、ロード・ムーヴィー特集といった番組組みがシネクラブで組まれ、それにかんがりの観客が集まりもするといった今日の状況はやはり喜ぶべきことだし、ことあるごとに、芸もなくヴェンダース、ヴェンダースと、となえ続けて来た甲斐もあったのだと胸をなでおろしたくもなるのだが、思えば、こうした作家が日本で市民権を得るのに十年近くの歳月が必要だったわけで、『海辺のボーリス』で紹介されるエリック・ロメールの場合は十五年もかかったことを考えあわせると、映画とは時間なのだ、気の遠くなるような忍耐の歴史なのだといった感慨に捉えられていささか懐古的な気分が誘われぬでもないのだが、それは、一篇のフィルムが、いわゆるリアル・タイムで消費される記号である以上の時間的な意味作用を含んでいる事実を証明してゐるわけで、映画を、社